大杉栄とベルグソン（中）

三浦精一

ベルグソンとソレルとサンジカリズム

「信者の如く行動しつつ、懐疑者の如くに思索する。」と言った大杉は、実によく読み、よく思索した。官憲に追いまわされ、生活のために書き、労働運動に生命を吹きこむ、実に超人的な活動を続けながら、婦人問題も起していた。軍部の凶刃に倒れて、ついにまとまった研究を書上げることはできなかったが、彼が生きていたということが、そのまま日本人というものの一つの姿を示すものである。

当時の思想界の情況を、「二、三年前から引続いて、日本の一般学術思想界ことに経済学界と文壇思想界とに一種の流行ということができるほど、多大の注意をよび、多大の影響をおよぼした二つの学説がある。一つは最初文壇思想界を風靡して、後に経済学界にまでその影響をおよぼした、ベルグソンのいわゆる創造的進化論である。他の一つは、最初は経済学界にさかんに論議されて、後には文壇思想界にまで研究心をあおりたてたソレルのいわゆるサンジカリズムである。この二つの学説が、ほとんど同時に日本の学術思想界の一般的問題となり、そしてそのいずれも、従来はまったく縁故のきれていた経済学界と、文壇思想界とに、その流行の一致を見たということは興味深い現象である。」と書いている。流行というものははかない。大戦を中心にベルグソンもソレルもサンジカリズムもほとんど忘れられ、マルクス流行に代えられた。

ソレルについて大杉は、当時の人々が、サンジカリズムの理論的指導者であるかの如く考えた誤解を訂正し、ソレル、サンジカリズム、ベルグソンの関係を正しく説明している。ソレルたちはマルクス派の社会主義者で、ベルンシュタインの修正派とは別の、革命的修正派と自称していた。ソレルは技術学校を出ただけで、社会学や哲学は独学した。しかし数学においてはフランスでも一流の数学者と呼ばれていたと言う。彼のノートの中には、プルードン、ルナン、ニーチェ、マルクス、ベルグソンからの書抜きが満ちていた。彼はマルクス主義をフランスの労働運動、経済事情の実際に照らし理論的基礎をプルードンに求め、哲学的にはベルグソンに結びついた。

ソレルとベルグソンとの関係について、大杉は当時京都大学の講師だった米田庄太郎氏の言葉を引用している。

「さてベルグソン氏の哲学を応用して、革命的サンジカリズムの主張を哲学的に弁説せんとする企ては、ソレル氏およびその門下生ベルト氏によって起されたものである。それよりベルグソンの哲学思想は革命的サンジカリズムの主張者の間に蔓延して、ベルグソン哲学と革命的サンジカリズムとの間には、はなはだ親密なる関係が存するごとき感じを世人に与え、さらにベルグソン氏自身も革命的サンジカリズムの主張者の一人であるとの風評さえ世に伝わったのである。同氏はこのために大に迷惑を感じて、種々の機会をとらえてのその弁護につとめられている。元来大思想家の思想は種々の方面、しかも互に相矛盾せる学説にすら応用され得るので……革命的サンジカリズムの論者がベルグソン氏の哲学を応用したればとて、ただちに同氏の哲学がそれと親密なる関係を有するものと考えるのは穏当ではない。……しかし余は、ベルグソン氏の哲学が一種の革命的色彩もしくは調子を帯びているところから、革命的サンジカリズムのごときものには、ことに応用されやすいと考えるのである。また余は余の社会学的見地から攻究すれば、哲学界におけるベルグソン哲学の生理と、社会運動界における革命的サンジカリズムの出現との間に、微妙深奥なる関係があると信じているのである。」

大杉は米田氏の所論に大体において賛意を表するのだが、「米田氏は『この微妙深奥な関係』について、ほとんど説いてない。これを論ずるには、現代哲学界の傾向と、現代社会運動界の傾向との、まずその一般史を述べて、次にその類縁を説き、最後にこの類縁の原因を、現代社会史の中に求めなければならぬことになる。しこうして、このことは、ベルグソン哲学が、なにゆえにわが日本の思想界にまでも風靡しきたったかの、もっとも根本的な説明にもなるのである。哲学は一種の流行である。したがってもその流行には多くの浮薄分子をも含む。しかしその流行の奥には、いわゆる群衆心理現象の奥には、多くの場合にすでに根本的なある社会的要求が含まれているものである。……けれども僕の今ここに説こうとするのは、米田氏と同じく、『ソレル氏はベルグソン氏の哲学の中から、特にいかなる原理をとって、これを自説に応用したかという問題である。』しかもこの問題については、幸いに、ベルグソン氏自身がドイツの社会学者ユウリウス・ゴルトンシタインに送った手紙の中に、次のごとく言っているという。『貴下がもレソレル氏およびベルト氏の著作論文を閲読されるならば、これら二氏が変化の一般性、真実持続における転化の不分割性、将来の創始性、およびその予見すべからざることなどに関する余の思想を、まったく余の述べる言葉のままに引用し、その上、これから過去の断片をもって、先天的に将来を構成しようとすることの不可能なことを認められるであろう……』

外国人でフランスのサンジスリズムの実際を知らない者は、こうしたソレルの理論だけに触れて、ソレルをサンジカリズムの父などと呼ぶようになった。ソレルたちは正直にこの誤解の名誉を拒絶して、サンジカリズムは労働者自身の労働運動からの経験から生れたもので、ベルグソンの哲学思想がサンジカリズムの理論に似ていることは、サンジカリズムから学んだのだと言っている。ソレルは両者の根底に共通するものを発見しただけで、決してサンジカリズム

の父ではなかった。

大杉は「ベルグソンの心理学説にも、またソレルの社会学説にも、負うところはなはだ多いと共に、決してその全部に敬服するものではない」と言い、ソレルに対する不満は、「サンジカリズムの理論家の第一の群によって、また多くの労働者によって、すでに十分に現われている。彼等のきわめて少数の、たとえばグリュフュールのごときを除けば、ソレルの影響を受けることなく、各々その理論的見解において独立の地位を保っている。ソレルのいわゆる神話であるサンジカリズムの運動方法は、彼等にとっては多年の間、幾多の犠牲を払いつつ血と骨とをもって築きあげてきた、なまなましい現実である。その日その日の難戦苦闘の間に一歩一歩、必要に応じては創り出してきた、もっとも堅実なる彼等自身の生活なのである。彼等は彼等自身のこの創造に信頼をおかざるを得ない……」

これがサンジカリズムである。労働者自身が創造したもので、定命的生成はなく、任意的自発的生成である。だからこそ「労働者の解放は労働者自身の手で」という標語も生れた。マルクスはこのサンジカリストの標語を「共産党宣言」にとり入れた。マルクスにして一片の良心があったら、「労働者の解放は輝ける指導者の手で」書くべきだったろう。インタナショナルでバクーニンと衝突した後、彼は英国やアメリカから運動を指令しようとしていたし、プルードンはマルクスの協力要請をことわっている。権力主義者にとってはサンジカリストの標語などは、労働者を欺瞞するために利用すべき道具でしかない。

大戦を契機としてCGTも共産主義者の手に落ちて変質させられた。もう一度サンジカリズムの復活が叫ばれている。労働者自身の解放を自身の手で成就するために、さらに深く知性を堀り下げて、生命を直観せねばなるまい。どんな形で新しい生命のエランは、サンジカリズムとして、この地球を突き破るだろうか。ベルグソンとサンジカリズムに共通するものを見出して、修正派マルクス主義新派という地金にベルグソン説を受入れたソレルの説が、フランスの労働者に迎えられる日があるとは思われない。

大杉は「本当の社会主義経済は、生産の全的改革、全的革命でなければならない……しかるに将来は、既知のいっさいのものとはまったく異質の、まったく新規のものでなければならない。なんとなれば、われわれは死んだ要素をもって、生きたものを再造することはできない。されば社会の将来は、各個人の将来と同じく、予想することができない。そしてこの将来に決定論や因果論の諸法則を適用せんとするものは、時間を空間の象の下に型どるのと同じ詭弁を弄するものである。」と言う。大杉の史観というべきものである。若い日、海老名弾正の教会に行っていた頃に新的聖書を読んだ、そのひびきを伝えるような言葉は、彼の死後九年にして出た『道徳と宗教の二源泉』にも通じるものがある。時間と空間の象のもとに、という言葉は容易にベルグソンを思い起させる。新しもの、古いもの、の観点は東洋でも西洋でも、色々にある。生れ出る生命はいつでも、どこでも、またいかなる場合にも新しい。自己の内部に持続し、醗酵する生命を直観し、それを意識し、その生の方向を知ることは、生の創造への参加である。空間的な、表層の自我を否定して、内面的な持続を意識することは、大杉が求めた真の自我への意識である。それは捨象、否定を通じての新生であり、創造であり、革命であり、社会の真の生命を見ることである。ベルグソンの直観

は否定でもある。

大杉の著書の題名ともなった「正義を求める心」は、ロマン・ロランを介して、民衆の魂を描いている。赤い表紙の美しい本だった。「生の闘争」に入っていた論文が幾つか採録されていた。当時キリストに狂う者となろうとした僕には、この「正義を求める心」という論文には共鳴できないものがあった。観念的に、一図に狭くなって行こうとしながらも、それを賀川豊彦や大杉に突き崩され、それでもまたファンダメンタリズムに帰ろうとしていた頃を思い出す。

サンジカリズムについて、「米田庄太郎氏を論ず」と副題をつけたのがある。米田氏が、社会的事情が違うわが国に、サンジカリズムのような思想や運動を輸入しようとしても成功しないと、言っているのを、大杉は「でたらめきわまる、まったくうそっぱちの屁理屈」だと罵倒している。大杉が、ロマン・ロランのように巨大な視点をもって、世界を見、民衆の魂を見て、それを共に生きようとしたことが分る。米田氏は因襲的な日本の衆愚しか見ず、大杉はその中に人類を見ていた。ロマン・ロランは思想的にベルグソンに近いと言われている。

サンジカリズムが民衆の中から自然的に盛上って、民衆の創造性を示したのを見たソレルは、ベルグソンに行った。大杉はこのソレルの考え方に、ベルグソン哲学の社会的適用の一部を見出している。しかしソレルの場合はマルクス主義の修正新派という地金の上にベルグソンを適用している。ソレルの愛弟子の一人がイタリア・ファシズムのムッソリーニである。それはサンジカリズムやベルグソンとは異質のものである。

哲学は芸術と同様に「創造」であり、「創作」であり、「生み出されるもの」である。幾千年の人類の思索の跡をたどって、まとめ上げ整理する作業もする。生命の現実を生きたままに表現する人間存在の心理であり、生理であり、生態である。しかし履歴書でもなく、履歴書的歴史でもなく、分類表でもない。空間的時間ではなく純粋持続を生きものとしての人間を表現するのである。こうしたものとして表現されたベルグソン哲学が、民衆が生み出したサンジカリズムとある共通なものを持っていたとしても当然だ。しかしサンジカリズムの変質や没落は、サンジカリズムの中に何か欠けたものがあったことを予想させはするが、ベルグソン哲学への疑問となるものではない。

第二次大戦は別の新しい現実をつくり出した。資本主義的合法的搾取国家群に対する強盗的ヒットラー、持たざる国イタリア、そして軍国主義日本の戦争は、いずれの国も民衆の愛国心をかき立てて、大量虐殺による勝利を目指した。敗れたフランスの民衆は、政府とは別にゲリラを組織した。防衛にせよ、革命にせよ、軍事行動ほど強権的なものはない。それは支配と服従の原理である。スペイン革命で民衆が迷わざるを得なかったのも、この点である。戦後の民衆運動は、強権的指導を甘受して、CGTも共産党の手に渡り、サンジカリズムも変質された。スペイン革命をわれわれが「内乱」と呼ばないのは、それが民衆の内部からのもので、民衆が反逆し、民衆が禁欲的になり、民衆が生産に全力をあげた真実の革命的事実を知っているからだ。政治が、強権が、この恐るべき革命を叩きこわしたのだ。政府にとっては内乱に過ぎないが、政治革命は権力の授受に過ぎない、ドン底から新しいものをつくる創造は民衆にしかできない。政治家にとっては、これ以上恐ろしいものはないのだ。チェ

コの民衆を見よ。民衆にとってイデオロギーは一体何なのだ。民衆の魂が要求するものは、イデオロギーではない。民衆は変通自在に自由を実現しようとする。この民衆と共に生き、この民衆と共に脈打ったのがバクーニンだった。だからバクーニンは不滅なのだ。

指導理論を考え、それをもつことと、権力指導理論に屈することとは全然別のことである。権力指導に屈した現在のCGTに関してアナルシストもサンジカリストも黙して考えねばならぬ時が来ているのである。民衆の中にもり上る自然的な、真の民衆の生の躍動の中に存在理由を持った原則に誤りは無かった。ただ、新しい現実に処して、民衆が求める新しい形式を見出さねばならないのである。サンジカリズムが今実力のないものになっていても、民衆が消え、その力や知性が枯渇したのではない。噴出の機会と噴出口が見つからないでいるだけだ。一の否定に直面しているのである。否定の現実の中には多数の反動的なものが混入している。こうした否定に全面的に同調することは自殺行為である。この否定の中のどんな小さいものが、生の創造に向うエランであるかを見出さなくてはならないのだ。それは思いがけない所に噴出する。今の学生運動もそれだ。真の大衆、真の人間をとらえてその生み出すものを知らねばならない。新しい酒は新しい革袋に入れねばならないとキリストは言っている。

人　類

ロマン・ロランは思想的にベルグソンに近いと言われている。直接にベルグソンに影響されていると言われる人々の中で、最も有名なのは、エドゥアール・ルロア、ジャック・シュヴァリエ、ジャック・マリタン、ガブリエル・マルセル、アルベール・ティボテ、モーリス・ブロンデル、ジョルジュ・ソレルなどである。「ベルグソンとソレル」の中に引用されている米田氏の言葉のように、大思想家の思想は、種々の方面、しかも相矛盾する学説にすら応用され得る。この人々はそれぞれに異なった傾向や特色を持つ人々である。

『創造的進化』から『道徳と宗教の二源泉』が出るまでの二十五年の間に幾つかの小篇が出ている。世界は『時間と自由』――心理、『物質と記憶』――生理、『創造的進化』――生物、の後でこの革命的思想が社会に延長されて説明されることを要望していた。人間そのものの心理と生理、生物としての人間から、さらに人間がつくる社会について考えることは、至って自然なことである。

科学としての社会は、デュルケムやレヴィ・ブリュルが忠実に、あるがままに、実証してくれている。これは知性が追及した社会の現実である。これで満足する人もいる。実在をはなれて思惟にたてこもったデカルト以来の哲学に満足する人もいる。しかし、常に固定を破って進んで行こうとするのが人間の生命である。ベルグソンは、哲学の対象は、自我を見つめる思惟の内省作用ではないことを示して、直接に実在に迫って行った。科学に足をふみしめて存在を追及した。天才的な大杉が共感したのは当然である。彼も、人間が形成し、そして人間が生きなやんでいる、この社会についてベルグソンに聞きたかったに違いない。

一九三二年に『道徳と宗教の二源泉』が出た。しかし、世界は騒然としていて、間もなく戦争に突入して行った。落付いて読む余裕もないもののようだった。この本が権力者や虐殺者のためのものだったら熱狂的に歓迎されたかも知れないが、この本は人類のものだ

った。世界のものだった。権力者は国境を堅固にかため、愛国心をかき立てて民衆を欺瞞し、民衆は扇動されて人類に背を向けて殺し合い、教会では自国の勝利を祈るのだった。政治家や権力者の声に耳をかたむける神があったら、神自身がその存在を否定することになる。国家の祈りをきく神などある筈がない。戦は終っても破壊された生活を再建するために民衆は国家権力に協力せねばならなかったし、組合運動にも革命にも、権力は欠くべからざるもののように血迷ってしまって、「人類」を考えることもできなくなった。生活してゆくことと、現実を生き抜くということは、何よりも大切なことで止むを得なかったとは言え、生きねばならないのは自分だけではない。自分の国だけでもない。隣人も、隣国もひとしく生きねばならない。家族や民族の紐帯は大切だが、人類として、人間として、殺し合わねばならない理由は無いのだ。

ベルグソンは「人間は非常に小さい社会のためにつくられたのであった、ということを先ず言っておこう。原始諸社会がかくの如き社会であったことは一般に承認されている。しかし元の精神状態は諸々の習慣の下にかくされて存在している。この習慣は文明の存在にとっては不可欠なものである」、「自然は小社会の拡大化に門を開いた」、といった。原初的には小社会だったという常識的な考察を容認し、こうした小社会の連合体も出来たにしても長続きせず、戦争も避けられず、その戦争も当初は征服を目指したものでなかったにしても終局において征服となり、アジアの大帝国も生じた。しかし大帝国もさまざまな力を受けて結局崩壊した。この崩壊をもたらすものは爆発力をもった原始本能だが、この本能の力を抑えるものは祖国愛と言う結合原理である。これによって広い地域を含む国民が起る。祖国愛には追憶と希望・詩と愛があり、わずかながら道徳美をもっていて、部族の根強いエゴイズムに打ち勝つための神秘的なものもそなえている。「人間の構造のプランのうちにも、蜂のそれのうちにも、前もって社会的生が織りこまれていたということ、社会的生は必然のものだということ、自然はわれわれの自由意志にいっさい任せきることができず、したがってまた自然としては、一人または数人が命令し、他の者たちは服従するよう手配するほかなかったということである」。

この支配と服従の関係をベルグソンは「同種二形発生」と呼んでいる。「われわれの一人一人が命令本能をもった首長であると同時に、また素直に服従する臣下につくられている」「われわれは革命の際にまざまざと目撃し得るものである。その瞬間まで控え目でつつましく、従順だった市民が、一朝突如として目をさまし、自分たちこそ人民の指導者なのだと主張する」。ベルグソンはこれによってニーチェの誤りを「この種類の両方を現実と考えてしまったことだ。一方には奴隷共が、他方には主人たちがいる」と生れながらのものにしてしまったことだと指摘している。

大杉は「征服の事実」の中に、階級闘争よりも古いものとして種族の闘争があったと考え、「元来ある一種族が征服せられたというのは、ほんの偶然の出来事からか、もしくは戦争術が下手だったからである」と言っている。そしていっさいの社会制度、中間階級の者が征服階級の組織的暴力と瞞着の、意識的無意識的協力者、補助者となって、闘争の動的美を讃美しようとしている。こうした大杉の考え方は、エリゼ・ルクリュが未開人の言葉として、二つの種族が共に住むには、この地上はあまりにも狭いという引用をしているの

と軌を一にしている。ベルグソンもこうした事実は認めているが、歴史を大観して解体と統一の原理を求め、支配と服従の事実を同種二形発生（ディモルフィズム）に求めていることは解説した通りである。同種二形発生ということは、見逃がせない事実で、われわれの周囲を見れば、昨日の若僧が今日は課長らしくなっており、明日は重役らしくもなるのである。

われわれが、アナルシストとして人間の平等を考えるとき、革命のときの命令と服従の関係なども一応、納得できる考え方をしておかねばならない。また知識的な分野でも、工場生産関係においても、組織のある所は勿論、組織のない所に、組織する場合にもこうした関係は現われる。私はこの関係を普通に言われる支配といった言葉でなく、指導と服従の関係として考えたい。この場合、人それぞれの才能の差があるのだから、こうした差を持つ者が指導と服従という、分業的関係において、平等の基礎において結合する関係と考えたい。ニーチェの言う権力意志はわれわれの中にあってはならないものである。指導や命令が誤まれば皆でその悲惨を享受するのである。

支配と服従を権力関係とした所に、人間の長い迷妄があった。「犯罪人の処理にあたっては、罪に罰を釣合はせることを自分の義務だと思っている人たちでも、ひとたび政治が口を出せば、無実の者の死刑へまでも、またたく間に突き進んでしまう」とベルグソンも言っている。

人類学において「社会構造」が考えられるようになって、こうした関係を一そう深く究明する手がかりがあたえられた。社会構造は人間集団の成員間に存在する諸関係の複合全体であり、各個人は、いわば、じぶん以外のものと、さまざまなあり方で結びついた細胞である、とラドクリフ・ブラウンは言うが、他の人たちは、社会内部の制度化された諸関係と集団関係の形態であり、「構造を持つ形態である」と考える。いずれにしても、ゴッドフリー・リンハートの言うように、社会構造の研究とは、社会を、形態のうえで、孤立した諸要素ないしは社会を構成する部分の間に成立つもろもろの関係の束になったもの、と表現できる。

それにしても、こうした関係や構造はすべてが目に見える形で存在するのではなく、関係の中にひそんでいるものも多いために、その社会の中に住んで、色々にからまり会った関係を内側から分析し抽象しなければならない。ルース・ベネディクトやマーガレット・ミードの機能的な研究も、こうした基礎に立つものである。

長い研究とたくさんの資料の分析から得られたアフリカ人のリーニジの原理もその一例である。リーニジは家系とか出自といったものであるが、アフリカの諸民族はそれぞれのリーニジによって、行動にも結合にも色々な形態をもっている、たとえばヌーア族は、それぞれの村にいくつかのリーニジがあり、共通出自のリーニジが集まって一つの氏族を形成する。部族の中のある氏族に、貴族と訳されているディエルと呼ばれるものがあり、各地域に分布している。そしてディエルのリーニジを中心にして他の出自のリーニジが集っている。さらにこの部族の中には神官のリーニジもあって、各集団間の調停の役割をはたしている。このようなヌーア族の政治的な構造の型を知ることが、それを基準にして諸族の構造の型を知る基礎となる。そしてヌーア族の場合にはこうした構造を持っていて「支配者がいない」ことがその特徴である。（八二ページ下段へつづく）

すべて、要攻撃地区とみなす。

重要事項。指摘された場所に戦闘部隊が存在しないことは問題ではない。逃げる住民たちによってばらまかれる恐慌は、我々が必要とする志気の上で効果をもたらすであろう。

極秘。戦闘部隊を最も志気沮喪させることは、野戦病院と負傷者撤収部隊とが攻撃されるのを見ることであると証明されている。したがって、この大戦の知識を覚えておくのは好都合である。

5、あらゆる可能性に反して、マドリッドが我々に抵抗するなら、送電線および水道の破壊を基本目標とみなされなければならない。後者は近年非常に効果的である。

6、マドリッドに入城したら、おそらく二〇日ごろのことだが、最初の処置は、教会の塔や、その他広い射程距離を提供する建物にどこにでも、機関を設けることである。機関銃は射程距離内に入るすべての敵の分子の上に、性を問わず発射されるであろう。死傷者を出さなくとも、恐怖をまき散らし、住民の積極的抵抗を阻止するのに役立つだろう。

7、非常に重要かつ秘密の事項。軍隊が発射体を「ダムダム弾」に変えるよう、指揮官はいかなる指示もしないだろう。この作戦が行なわれるかどうかも知らない振りをする。そして、これを奨励するために、敵に大きな怒りを表明し、彼らの「狙撃兵」らが類似の発射体でひき起した恐るべき破壊に激しく抗議しなければならない。これによって十分であると考えられるはずだ。』」

この印刷物の真正性は、戦争全体を通じて彼らの犯罪的指令がすべて文字通り実行されたという事実によって確証される。この指導理論がファシストとヒトラー流によることもまた間違いない。

これら集団犯罪とその犯行の巧妙さを検討したなら、「赤」のせいにされる行き過ぎがどこにあろうか？　スペイン人民は、彼らが購ったその国土を占領している大土地所有者、資本家、貴族、聖職者、軍隊によって破られ、裏切られた後、みずから防衛するよう挑戦され、攻撃され、強制された者であったことが、故意に忘れられていたのだった。

（六〇ページ下段より）

同様にリーニジによって結合していながら、国家と言った形態をもつものがあり、国家の形態をもっていても、支配者が被支配者の関係だけのもの、そして征服被征服の関係をもつものが分類される。ブガンダ族では召使をやとうのに、非ブガンダ族か、自分につながりのないブガンダ人しか使わない。それは親戚を召使にするのは家族全体が当惑し、恥じることだからである。ところがルオ族は「むかしながらの平等主義的な体系をもち、近代的地位の差をこえて、非常につよく男系の規制がものをいい」、親戚が召使いとしてやとわれ、それも公然と召使いの資格においてではなしに、主人対召使の存在しない伝統的な体系におけるように、家族の一員としてやとわれるのである（リンハート著『社会人類学』から）。

人類の社会に色々な結合形式はあるにしても、生得のものとして権力意志や奴隷性を考えることは間違いで、こうしたものを持つ政治構造も人為的なものであり、変革すべきものであることが分るではないか。そしてベルグソンの同種二形発生（ディモルフィズム）の考え方を基礎として、支配と服従の関係を、指導被指導の関係、分業的関係において再考することを提言する。

（つづく）